

こもれび文庫

第二集

こもリズム研究会

父よ

父よ

こもれば文庫

第二集

こもリズム研究会

父よ

こもれび文庫第二集

こもリズム研究会

あとがき	80	まえがき	04
僕は穴だらけ	48	父	10
ふでばこ	52	約束	14
2030年の私	56	家族	18
冬の前に	62	秋	22
声	66	おしえご	26
日曜の夜	70	小学3年生	32
目覚まし時計	74	好きな人	38
		優しさで傷を愛せるか	44

小さな体を丸めて女子学生が座っている。

「生きている意味がわからないんです」

ありきたりの励ましを拒否するようなシルエットに言葉を飲みこむ。ふっと息を吹きかけたら消えてしまいそうだ。「どのようにこれから自分が生きていくのか、想像ができないんです」

何かに失望するとか悲しいことがあるとか、そういうのではなく、生きていくことの実感が薄れているような感じ。その小さな顔を見つめる。

このような若者と出会うことが多くなった。ひきこもり、不登校を取材するためにフリースクールを訪ねている

わけではない。ふつうに大学で授業をしているだけなのに、こういう学生と出会う。

いじめやひきこもりの話を授業するからだろう。傷ついた若者たちと取材で会ってきたことで、内にこもる気持ちを感受する「におい」が私にあるのかもしれない。

どこまでが現実でどこからが夢なのか、その境があいまいになって心が漂っている風景を眺めているような気がしてくる。

死をほのめかす文字をネットで見ると「一緒に死のう」と誘ってきた男がいた。そうやって若い女性らを自宅に呼び寄せては次々と殺した。被害にあったのは15歳から26歳までの9人。

刑事裁判で弁護人は「殺人の承諾があった」と訴えたが、

男は否定した。「死にたい」とネットに書いても、実際に殺されることを承諾した人はいなかったと男は言う。

「女性を呼び込んでレイプし、金を奪おうと思った」。検察官の質問に男は答えた。死刑の判決が男に下り、確定した。

「死にたい」と書きながら、いざとなると殺されることに同意はしない。

男の言葉が真実だとするならば、魔の手にかかって命を落とした若者たちは「生きたい」と心で叫んでいたのではなかったのか。一緒に生きる意味を探してほしくて、男のもとにやってきたに違いない。

「生きている意味がわからない」という学生にしたところ

で、本当は生きている意味を教えてほしい、生きている意味を見つきたい……と言いたいのではないのか。本人はそういう自覚がなかったとしても。

言葉には〈へいのち〉が宿っている。不思議なもので書いている文章に自分の知らない素顔が現れることがある。学生たちに自分のことを文章に書いてもらうのは、自分の知らない心の中を知るためである。

どんな自分でも目をそらさずに向き合ってほしい。自分の中にある宝物を探そう。みじめな自分でも心を抱きしめよう。戸惑いを見せる学生たちに繰り返し言葉をかける。

ふだんは明るく快活な女子学生の内面に暗い雲が漂っているのに驚かされる。

深いところに怒りや恨みのような負の感情をまだ煮えたぎらせている。

子どものころの黒い染みを消すことができません、その痛みを隠している人もいます。

それでも、みんなどこかに生きるための明かりを探している。

雨上がりの朝、木の葉から陽光をためて落ちるしずくのように、せつなくて、悲しくて、美しい言葉。そうした文章を集めて「こもれば文庫」と名づけた。

若者たちの作品をnote (<https://note.com/comolism>)でリリースしている。2022年度に掲載された作品に未掲載のものを加えて本書を作成した。

父

わたしの父は犯罪者です。人を傷つけました。何度か窃盗を行いました。

そんな自分に耐えられなかったのか、父は自ら命を絶ちました。

とても真面目な人だったのです。窃盗も傷害も、そういう病気のせいだったのだということは、父が亡くなってから初めて知りました。

父が罪を犯して捕まった時も、わたしたちのことを考えて両親が離婚した時も、父が行方不明になった時も、わたしは泣けませんでした。いつもなら大号泣してしまうお葬式で、父の姿を見ても「いつもみたいに寝てるなあ」としか思えませんでした。

わたしに宛てられた遺書を読んで、また大袈裟なことを書いているなと思いました。「自慢の娘」という言葉には、ならもつと生きて我慢してくれよ、とちょっとだけ思っていました。

この12年間、父の仕事の関係で、一緒に暮らしていませんでした。月に1回、忙しい時は半年に1回だけ家に帰ってきて、家族みんなで過ごしました。わたしが大きくなってからは、父が1人で暮らしている家に遊びに行ったりもしました。

文通をするのも、1人で新幹線に乗るのも、夜更かしをしてアイスを食べるのも、全部父にもらった、きらきらした、大切な思い出です。

だからこそ、父が死んだと知った途端に、大人たちが発する「かわいそう」という言葉を聞くのが嫌でした。だから、父がいないという

ことを隠して生きてきました。

ちょうど1週間くらい前のことです。成人式の前撮りの話になって、「お父さんももちろん来たでしょ？ やっぱり泣いてた？」と友人に聞かれました。

もちろん来ていません。だってもういないのだから。でもバレてはいけなさと、咄嗟に「うん。ずっと泣いてたよ。」と嘘をついてしまいました。

家に帰ってから、わたしはずっと嘘をついていかないといけなさんだなど、虚しくなりました。それと同時に、これからのわたしの人生に、父は登場しなくなるのだと、初めて実感しました。

ヴァージンロードと一緒に歩いてくれると約束したけれど、それも

叶いません。父とのLINEのトーク画面も、一生動かないのです。

2021年1月24日、20時18分に送ったメッセージには、今も既読がつきません。もう使われることはないトーク画面なのに、わたしは今でも削除することができないでいます。もう父は過去の存在なのだと理解して、わたしは初めて泣きました。

多分この先も、わたしは嘘をつき続けます。父がいないことを告白しても、自死を選んだことは言えないでしょう。これからも、父と歩むはずだった未来を思い出して泣くと思います。でもいつか、それもすべて、父との大切な思い出の一部にできたらいいな、と願っています。

きり

約束

眠れない夜って、どうすればいいんだっけ。祖母から教えてもらった手のひらのつぼを押ししても眠気は現れず、羊も55匹目を数えた所で飽きてしまった。チクタクと時計の音がやけに大きく聞こえる。明日も学校があるのに、どうにも寝付けない日だった。

私は眠ろうとすることを諦めて、二段ベッドの上段から降りた。下段には弟が眠っている。すやすやと熟睡している姿が少しだけ腹立たしいが、これといって彼を起こす意味もないので、音を立てないように寝室のドアを開く。すると消したはずの階段の電気がついていて、リビングの方が何やら騒がしい。そーっと、階段下を覗いた。久しぶりに見た、両親の夫婦喧嘩だった。

「ゆうくん起きてる？ こっちきて」

私はひそひそ声で弟を起こした。なんとなく、そうした方がいい気がした。寝ぼけ眼の弟を呼び寄せて、螺旋階段の隙間から顔を出してその喧嘩を眺めた。もう深夜1時過ぎ。いい加減にしてよ、子供の学費はどうするの？ うるさいな、ちょっとは渡してやるだろ。そんな言い合いが続く。私も弟も、それをじつと聴いている。

昔から我が家の家計が芳しくないことには気づいていた。私たちの前ではお金の話をしないようにしてくれているけれど、「お金がない」ということはそう易々と隠し切れるものではない。東京で子供二人を育てるにはそれなりのお金がかかる。それなのに父は毎日アルコールを飲み歩いて、家に入れるお金は微々たるものだった。母は父が真面

目に働くように願ったが、プライドの高い父は母からの願いを聞き入れることはなかった。そして、ことあるごとに舌打ちをする人だった。その日も父は母の追求を無視したり、適当にあしらったり、舌打ちをしたり。まるで真面目に話し合う気はないようだった。

私は舌打ちをする人が本当に苦手だ。自分の苛立ちをアピールして威圧しているようで、脅しみたいだから好きじゃない。母と喧嘩になった時、私たちが言うことを聞かない時、応援しているサッカーチームが負けた時、気に入らないことがあるとすぐ父親からチツという音が聞こえてくるのがこの上なく嫌だった。小さいことだけど、小さいことではなかった。いつしか舌打ちをすることは、私たち姉弟にとって父親のようなダメな人間の象徴になっていた。あんな大人にはなりたくない。あんな大人になってはいけない。だから、舌打ちは絶対しちゃだめ。

「約束だよ」
「うん、約束」

そう言って、あの螺旋階段の踊り場で、私たちは指切りをした。あれから8年近くが経った。誰かが舌打ちをするのを聞いたたび、ドラマで夫婦が喧嘩するシーンを見るたび、私はこの時のことを思い出す。当時6歳だった弟は中学2年生になって、絶賛反抗期である。勉強しなさいと言う母に屁理屈を並べ立て、ほぼ毎日ブーブー文句を言って反抗している。でも舌打ちだけはしない。私ももちろんしない。あの日の約束を今更確認することはないけれど、それは暗黙の了解となつて、今も生き続けているのだと思いたい。

家族

「おもちゃいらないの？ 片づけないと捨てるよ！」

いやだと駄々をこねていると、父の手はおもちゃから私に移り、全面ガラス張り、15階のベランダに出された。夜だと暗いほうから明るいう場所がよく見える。泣きながらも、母と室内で話す父がほんの一瞬、笑みを浮かべたのを、私は見逃さなかった。3歳の記憶。ほんの5分くらいのことであろう。あの顔が今も脳裏に焼き付いている。

その日は突然やってきた。2012年の夏の朝、妹が姿見を倒して割ってしまった。「あー！」と割れたことに対して驚く中、父は妹を

抱きあげ床の間に連れて行った。次の瞬間、妹が号泣する声が聞こえてきた。妹がけがをしたか気にする言葉など一つも聞こえてこなかった。ただ1時間、彼女が泣き叫んでいた。この日、「家族」が嫌いになった。

「うちにいられると迷惑なんだよ、め・い・わ・く。そんなやつうちの子じゃない。お願いだから出ていってくれよー。お願いします、出ていってください！」

鮮明に再生できる言葉。お望み通り、2020年の9月、夜7時私は家を飛び出した。玄関までついてきた男性は私が玄関を出た瞬間、扉に鍵とドアストッパーをかけた。

当時は受験生だった。受験真ただ中であつた9月も家事をしてい

た。出先から帰ってきた父がキッチンに立つ私を見て、「余裕そうだね。勉強は？」と言った。確かにそう、言ったのだ。

「余裕じゃないし、お手伝いしてるだけじゃん」

苦言を呈し、抗議すると、勝手に持論を展開し結論付けて、追放された。

家を出ると、私は無敵になれる気がした。泣き叫びながら、夜の田舎道を歩いていく。素足にローファー、Tシャツにジーンズ。正直、警察に捕まったっていいと思った。でも、生活が立ち行かなくなる。母や兄弟が路頭に迷うことになる。お金がなければできないことは多い。補導されたら、私にもバツがついてしまう。できるだけ警察に見つからないように深夜12時まで歩き続けた。

本気で父が変わってほしいと思ったこともある。でも、成人男性の力に勝てるわけがないのだ。こぶしも足も体もボールもマウスもなんだって飛んでくる。72kgの父に全身で押しつぶされる弟を見ているうちに、謝罪のような言葉を叫ぶ弟を見ているうちに、声が聞こえなくなった。

「おい！ 謝れよ！ おーい!!!」

また音が聞こえてくる。人間が転ぶ音。叫ぶ音。ものが床に落ちる音。壁にぶつかる音。私はイヤホンをさした。静寂。耳の中にはひとがメロディーに乗せて訴える声が聞こえる。

「愛されるような誰かになりたかっただけ」

みり

秋

「私はね、親の離婚裁判に出たことあるのよ、すごいでしょう」と自慢しながらニヤニヤ話しているバカがいた。

そのバカは、私だった。

家の5階から飛び降りたらどうなるだろうね、15歳の夏の夜、こんなことばかり考えていた。

秋の夜は、涼しくて気持ちよかったな。私が一番好きな季節だった。小学校三年の頃から、父が単身赴任で海外行っていて、家に帰ってくるのが一年に一回しかなかった。

父は、いつも季節がちょうど真夏になった頃に帰ってくる。外、蒸し暑くて耐えられない空気、うるさいセミの鳴き声、売店の冷蔵庫から出した瞬間すぐに溶け始まるアイス、垂れてきたアイスのせいでベタベタになった手と、通りがかりの人の笑顔、全てが嫌だった。

家中、どぎつい言葉が飛び交っていて、愛し合って結婚を選んだはずの二人は、どうしてこんなになったのか。ご飯を食べている途中に投げ出されたお皿、弟に食べさせようとしたご飯は薄い黄色の床に飛び散っていた。一刻も油断せずにお互いの言葉尻をとらえながら生きるのが楽しいのか。

人をイライラさせる空気が部屋に満ちた夏、嫌いだった。逃げようとしても逃げられない夏、嫌いだった。

夏の終わり頃に、父が家から離れていく。それと同時に、秋もやってくる。耐えられない蒸し暑い空気も、涼しくなった。開けっばなしの窓から流れてきた夜風がすごく気持ちよかった、夜も静かで、家の中にゆるい空気が漂っていて、ぐっすり眠れる。秋が気持ちよくて好きだ。

17歳の秋、親の離婚裁判が行われた。待ちわびた日がやっときた。

私は母と原告席に座っていて、父が被告席に座っていた。親が弟の養育権でもめていたから、裁判をするという選択肢しかなかった。

裁判が始まる1ヶ月前、母と一緒に散歩に行った夏の蒸し暑い夜に、母にこう言われた、

「弟はまだ小さいんだから、父に養育を託したらまともな大人になれるわけがない、あんたも弟のことが心配でしょう。それだったら、裁判の日にあんたは父と一緒に生活したいって裁判長に言っつてね、あんたもう高校だから、どこ行っても自由だから、養育権が父に取られても自分で行く場所を決められる」

その瞬間に、心のどこかが引き裂かれるような気がした。心の何かが静かに粉々に砕けた。母の期待に添うために、私は大人しく「はい、わかった」と答えた。そう答えるしかなかった。

その日に、被告席に座っていた父は、父じゃなかった。憎しみに満ちた父の目つきは、忘れたくても忘れられなかった。それからの数年間も、家族のことを思い出すたびに、その目つきが時々勝手に浮かんでくる。怖かったな、その目つき、私は目を逸らすのに必死だった。秋も嫌いになっちゃった。

おしえご

「先生、久しぶり！」

私には4回しか教えたことのない教え子がいる。4回しか教えたことがないのに目が合うたびにパッと笑顔が咲き、1年しか違わないのに私のことを「先生！」「先生！」と呼ぶとてもかわいい教え子がいる。

私は大学1年の春から冬までの間、個別塾の講師をしていた。担当は英語と国語、とちよつと数学。推薦受験で入学したような私のぬるい知識ではこの子たちの受験料に見合わないのではと思ひ1年持たずに辞めてしまった。小学生の頃は塾を忌み嫌っていた私だが、講師という立場で入ったその塾はとても好きだった。私の担当の子はまとも

に勉強をしてくれなかったので授業時間の七割方は一緒にお絵描きをして終わった。

私には少し厄介な案件が回ってくるが多かったように思う。私が冒頭の彼女に出会ったのはわんぱく坊主も羽織1枚は着て来るようになる11月下旬のことだった。塾長が制服姿の女の子と談笑しているところを通り過ぎると呼び止められた。どうやら国語が「とんでも」らしい。「ほかの教科は上出来なのにね」と笑う塾長の隣で、他人事のように「ほんとそうなんですよ」と楽しそうに笑っていたのが彼女だった。こうして私は彼女に国語を教えることになった。

確かに彼女の国語力は芳しくなかった。初回授業、本当に苦手だとなを押しすので、さすがに大丈夫だろうと始めた小学6年生のテキストが解けず、3年生のテキストから始めた。彼女はその他優秀な成績の

おかげですでに大学が決まっていた。そのため「若しくない国語」を本気でどうにかしなければいけないわけではなかったのだが、最低限の国語は一生必要だからと苦境に身を置くまじめな子だった。

彼女は登場人物の心情を問う読解問題を特別苦手とした。彼女曰く「架空の人物が何を考えているかなんて分かるかよ！」ということらしかった。塾にいる間に何度も聞いたセリフだった。そういう時私はたいてい、映画でも漫画でもアニメでもいいからいっぱい見るようにと勧めた。しかしそれに対する彼女の反応はいつもとは違った。映画も漫画もアニメもダメだという子は初めてだった。「私感情がわからないんだよね。」彼女はそう言っているものように笑った。

彼女はリストカットをしていた。春の兆しが見えない3月のある日、私たちはチキンのクリーム煮が有名なカフェで向かい合っていた。そ

の日は雨予報だった。チキンは柔らかかった。彼女はヘラッと笑っていた。

家が本当に嫌いなんです。パパとママが毎日喧嘩して……その声が二階の私の部屋まで聞こえてくるの。声が聞こえるときはまず耳をふさいで、でもイヤホンは妹に貸しちゃったから布団をかぶる。それでも聞こえてくるの。寝られなくて。まあ最近は締め作業で1時までバイト入れているから聞かないで済んでいるんですけどね。

両親の喧嘩はこの4年間欠かさず行われている。暴力的な言葉も、物も飛び交わない「たかが」喧嘩。

彼女は別に両親のことが好きなのではなかった。彼女の父親は自分の希望を押し付けてくる人だった。彼女の母親は「ふくん」ですべてを終わらせる人だった。腹が立って泣きたくならないのかと聞くと

彼女は、泣く時の感情がよく分からないと答えた。頬を平手打ちされたように時が一瞬止まった。

小3の国語に苦戦する彼女を思い出した。いつも笑っている彼女を思い出した。この後私はいつも通りの軽口を返せただろうか。

人に正の感情よりも負の感情が残りやすいのは、負の感情の方がエネルギーを発散しにくいからだと言ったことがある。嬉しい時、楽しい時は、腕を高らかに上げたり、大声で叫んだり、友達に共有したりすることでエネルギーがあつという間に飛んでいく。しかし悲しい時や辛い時、人は誰にも言わずに心の奥にしまい込むことが多い。その学者先生は、涙は負のエネルギーを発散するためにあるのだと言った。

涙が出ない彼女にも心の限度額がある。溢れ出た感情はセーターの袖に隠されている。もう少しの間春を遅らせてほしいと筋違いな願いを心でつぶやいた。

叶乃

小学3年生

私はその日「マテ貝」から「ランボルギーニアヴェンタドール」に無事昇格を果たした。

小学3年生の彼は笑いながらその長ったらしい名前を呼ぶこと対して大きな興味も知識もない私にはそのあだ名がイマイチ良く分かっていなかったけれど、車好きの彼からすればそれはとても良い名前らしい。

「マテ貝、お前は今日からランボルギーニアヴェンタドールな」

彼は誇らしげに笑ったのだから、それは間違いないのだと思う。

私は家に帰ってその名前をGoogleの検索画面に打ち込んだ。中古車サイトに「ランボルギーニアヴェンタドール」と載っていたそれは、真っ赤でスタイリッシュだ。彼に言わせればそれは「超かっこいい」ものであったけれど、その値札は無邪気に「欲しい」と言えるような値段ではなかった。とにかく私は車好きの暴れん坊から5000万円を超える高級車のあだ名を付けられるほど、彼から信用を得始めたのである。

「死にたい」

大好きな車を見ながら彼がそう吐いた時、私は驚きを隠すことはできなかった。

バイト先のベランダで、ボールの蹴りあいをして遊んでいた時だった。彼が私の顔に向かって思いっきりボールを投げ、それだけで

は飽き足らず殴ってくるものだから、少し注意をしたのだ。叱られたことにへそを曲げた彼は、ペランダの唯一の出口に向かい目の前を走る車を見ていた。いつもはカッコいいときやあきやあと声をあげるのに、その横顔はずいぶんと静かだった。

「俺は社会に出てないし、いなくても誰も困らないだろ」

「大人は死んじゃ駄目だっていうけど、なんで」

「車にひかれて死んでやる」

いつもとは違うおとなしい声で淡々と話した。私は他の大人と同じように「死んじゃ駄目だよ。ほら、お菓子食べられなくなっちゃうよ」と笑って言う事は出来なかった。この間まで子どもだった私には、子どもにだって死にたいことがあることを知っていた。「お菓子」や「ボーリング」なんてことで、その気持ちが無くなる程簡単なことではない

ことも知っていた。

「なんで死んじゃ駄目なの」と何度も聞いてくる彼に、私は「『死ぬ』っていう意味を君はまだ理解出来てないからだよ」と言った。彼の死にたいと思う気持ちやそのきっかけをないことにして、その言葉を否定したくはなかった。

「死ぬ」「ぶっ殺すぞ」と野蛮な言葉を連ね、殴りかかってくる癖に、小さな切り傷をつくただけで痛いと言わめき、私が怪我をすると不器用にも優しくしてくれるような、どこかアンバランスな子だ。

みんなと同じランドセルを背負っているのに、みんなと違うクラスで違う授業をして、放課後もすぐに帰れずに放課後、デイスーパービスなんという『檻』に連れていかれる。日本語が分からない他の子とは違い、たいていの事を理解できる彼にとって、社会は優しくないのかも知れ

ない。

そんな彼が少しでも生きていたいと思ってくれるように、その場所を『檻』ではなく『第二の家』と違って貰えるように、私達は今日も彼らに「おかえり」と笑うのだ。

赤木

好きなひと

高校時代に好きな人がいた。一つ上の先輩だ。その人には文武両道という言葉がぴったりだ。生徒会長をしていたし、スポーツも、全国大会で入賞するような人だった。不正や悪を許さないまっすぐな性格で、言葉もストレート。全校集会、壇上でスポットライトに照らされるその人を初めて見た私は、密かに憧れるようになった。

共通の友人がいたことをきっかけに、一緒に帰るくらいには仲良くなった。今思い返せばとても気持ち悪いことだが、その人の移動教室の時間を全部覚えていた。今でも覚えている、火曜日の5時間目と6時間目の間の休み時間。体育館棟の廊下ですれ違うことができる時間

だった。

高校2年生の1年間は、その人がすべてだった。頭の良いその人に憧れ、勉強も頑張った。スポーツ万能なその人に憧れ、部活も頑張った。その人に出会うまで、何もやる気のなかった私の高校生活。私を暗闇から這い上がらせてくれた希望の光だった。

学校帰り、一緒に帰るときは、よくドーナツを食べに行った。休みの日にはカフェで勉強を教えてもらった。その人から教えてもらったバンドのライブにもよく一緒に行った。その人が大好きで、その人の好きなものは全部好きになった。

ここまで読んで気づいただろうか。高校時代に好きだった人は私と同じ、女性だ。恋愛感情で、好きだった。自分は周りとは違う。多少

の違和感はあったが「性的マイノリティ」なんて自覚もなく、ただ好きだった。手を繋ぎたかったし、デートもしたかった。しかし、それを彼女に伝えてしまえばこの関係は崩れると思った。この恋のことは誰にも相談しなかった。周りにとやかく言われるのも嫌だったから、一人で泣いていれば良いと思った。

あの日々から5年が過ぎた。2022年11月30日。「結婚の自由をすべての人に訴訟」東京地裁判決の日だ。9人目の原告である佐藤郁夫さんは、周りから「いくさん」と呼ばれ親しまれた。しかし、いくさんは今回の判決を迎える前、今年一月に急逝した。

「普段、帰り時間を合わせ、スーパーで夕食の食材を買い、時には外食もします。映画や録画したドラマを観たり、ユーミンなどのライブに行ったりします。私たちの日常は男女の夫婦と何一つ変わりません」

いくさんが遺した言葉。彼らの生活は他の誰とも変わらない日常。ものすごく普通で、ものすごく幸せなのに、この国の法律は同性カップルが「結婚すること」を許さない。選択肢がないだけでこんなにも辛い。私や友人の生活だって、いくさんと同じ。

主要先進国・G7で同性婚を認めていないのは日本だけ。「多様性を認めよう」「LGBTQ差別をやめよう」誰もが口を揃えて言うが、何か前進できているだろうか。強いて言えば、今回の判決で「同性婚の選択肢がないのは違憲」という進歩。

「私のこと差別しないで！」とか、別に求めていない。ほっといて欲しいんだ。私が女の子を好きだと言っても驚いたりせずに「そっか、それでどんな人なの？」と話を聞いてくれる社会になって欲しいだけ。当たり前のように「彼氏いる？」と聞かれる窮屈な社会から、ほんの少し気を遣える社会に変わって欲しいだけ。

同性婚が認められたら死人が出るわけでもない。同性カップルが結婚できるようになるだけで、周りの人たちに大きな変化があるわけでもない。凝り固まった固定観念は、誰かがほぐさなければ変わらない。微量でも、私は前に進むための努力をしたい。好きな人がいること。将来のための選択肢があること。今の私にその選択肢こそ無いけれど、同じ夢に向かって一緒に走ることができると。それをそっと見守ってくれる優しい社会があること。これって、豊かさだと思う。

mm61

優しさで傷を愛せるか

本当はずっと優しい人になりたかった。優しい人でありたかった。

優しさとは脆弱ものだど知っていながらも、私はただ優しい人でいたかったのだ。

記憶の片隅に過去がチラつく。

小さな頃、殴られて蹴られて、何度も家族に虐げられてきた記憶も、いじめられた記憶も、全てがもう過去のものだ。過去は変えられない。変えられるのは未来だけ。

そんなことわかっていようと、辛い気持ちは変わらずに残る。それにどう折り合いをつけていくのかを考え続ける日々である。そうして、

優しさを求めた。

赦すことは優しさなのだろうか。

忘れることは、前を向いて振り返らないことは、優しさなのだろうか。私には分からない。それが優しさなら、私は優しくはなれない。

だけど、たくさんの優しさに触れながら、優しくありたいと思った。たとえそれが取って付けたような偽物でも、それでよかった。優しいということとは強いことだと思う。強さは自分を守ってくれる。そう、だから私は優しくなりたかったんだ。

精神科閉鎖病棟のベッドの上、中学の保健室の椅子の上、高校の相談室のソファの上。私の居場所はいつも「普通」とはかけ離れていた。それでも、確かにそこは私にとっての安全基地だったと思う。

人間が愛着を形成し探索行動をするには、安全基地が必要だそうだと。時には傷ついたり、発見したり、色々なことを感じながら、確かにある居場所に安心し、人は前へ進んでいく。

私は不変の愛を受け取ることができない。その場その場で、数年で終わる場所で、愛を育んで、育まれている。家族に愛は望めない。もうとつくに期待なんてしなくなつた。退院や卒業というタイミングで失われるそんな居場所に、何度も涙した。けれど、今はそれでいいんだと、そう思う。他の人に比べて、たくさんの帰る場所が、私にはあるんだから。あたたかい優しさに触れては、私は前へ進んでいく。

自分を愛するのは、辛い。それはトラウマ経験のある人に共通した意識だろう。自分自身を加害者だと思っている面と、被害者だと思っている面があるから、自分を愛することで自分を「赦した」気がしてしまうのだ。自罰し続けなければいけないと洗脳された人に、自分を

赦して、そして愛してあげようと言ってもそれは難しい。そもそも自分を愛した経験なんてないし、基本的には自分自身を責め続けているからだ。

しかし、だからこそ、自責の部分は変わらないとしても、被害者の立場を降りるためには、加害者と被害者の関係を明らかにしなければいけない。被害者の立場から降りるために、私は優しくなりたいたい。赦して楽になるために、私は優しくなりたいたい。

私はずっと、優しい人になりたかった。

琥珀

僕は穴だらけ

夢をみた。

穴が沢山空いた黒い人の夢。その人が言った。

「すごく笑うようになったね。」

「楽しそうだね。」

「友達いららないんじゃないの？」

水色に色を変えて言った。

「もう忘れちゃったかな？」

目が覚めて、考えてみた。あれは、あの言葉は……って。

過去の僕なんじゃないかって考えに行き着いた。

だから、声に出して言ってみた。

確かに、今まで生きるのは楽しくなかった。正直、辛かったよ。一日でも一秒でも早く僕の人生を終えたかった。友達なんていらなくとも思った。でもね、今は生きるのは辛くないって思うんだ。

だって、僕が笑っただけで、隣で喜んで一緒に笑ってくれる人を見つけたから。僕が泣いていると、隣で何も言わず寄り添ってくれる人を見つけたから。辛い過去を忘れられる一日をくれる人を見つけたから。その人が、『そこにいたんだね』って、そっと肩に手を置いて安心させてくれるから。

今はそんな人見付けられないかもしれないけど、意外と近くにいるんじゃないかな？

今は分からないかもしれないけど、近いうちに必ずね…。

何だか心が軽くなった気がした。気がするだけで、フラッシュバックもこんな夢の数も減ったわけじゃない。でも、一人じゃないと気づくことができた。

震えて小さく縮こまっている過去の自分を見つけ、そっと寄り添って見捨てないで生きようと思う。

今、隣にいる人のありがたみが分かるのは、過去の自分があるからだから。

れいや

人のものを、盗んではいけない。

小学校に入学してすぐに、嫌いな女の子が1人できた。あゆかちゃんだ。彼女は、バレエをやっていた。廊下を歩くと、いつもくるくる回ってバレエのターンを自慢するように見せてくる。そうやってターンするのに、毎日短いスカートを履いているからパンツが丸見えで、本当に気分が悪かった。しかも、信じられないほど自己愛が高い。正直美人の部類に入っていない男の子たちに「ブス」と揶揄われていた。

「小さい頃ブスだった子は、将来めっちゃ可愛くなるんやで」といつも答えていた。そんな返しをするところが私は理解できなかった

し、変だと思っていた。

そう思っていた人は私だけではなかったようだ。クラスの女子は、ほとんどあゆかちゃんが嫌いだ。全員同じ人が嫌いな状況が生まれると、どうなるか。はじめだ。小学校1年生のいじめは、無視したり、一緒にトイレに行かなかったりと、しょうもないけど当事者にとっては辛いものだったと思う。

ある日、私たちは筆箱を隠した。特別な筆箱で羨ましかった訳ではなく、自分のことを可愛い可愛いと言ってくるあゆかちゃんが、気持ち悪いと思ったからである。

帰りの会で先生がクラス全体に呼びかけた。

「あゆかちゃんの筆箱がないです。知ってる人いますか？」

私たちは黙って目を合わせ、ニヤニヤした。

あゆかちゃんは、これまで無視されてもペアワークで一人になっても笑っていたのに、その時だけ泣き始めた。わんわん泣きながら、その筆箱はおばちゃんが買ってくれたと話し始めた。

おばあちゃんは今入院していて会えないのに、もう一回買ってもらえるかわからないのになんで盗むのだと。筆箱の中には転動しているお父さんからの手紙も入っているのだと、言っていた。

「ごめんなさい、本棚に隠しました」

私は泣いて自分の罪を告白した。筆箱が彼女にとってそこまで大切なものとは、知らなかったし、想像したことでもなかった。私たちは「隠した」と思っていたが、「盗まれた」と彼女は表現した。その日から、

あゆかちゃんは教室ではなく保健室に登校しはじめて、小学校を卒業するまで同じクラスになることはなかった。

人の大切なものは、盗んではいけない。彼女にとって大切なものは筆箱だったけれど、私たちは筆箱だけではなく教室での学校生活も奪った。この上なく感情的で、個人的な事情で彼女の時間や未来を盗んだのである。

乃彩

2030年のわたし

8年後、27歳の私が、まともな人間関係の中で健やかに過ごしていますように、と願う。

20歳の誕生日を目前にして、既に世界がひっくり返ってしまうような絶望をいくつか味わっている私は強いはずだ。贅沢は言わないから、もう良いことしかないと思うくらいのは許してほしい。今の充実した生活と素敵な人間関係が持続していますように。呪いから解放されていますように。

私の人生の最初のピークは奇しくもちょうど8年前の12歳までであった。中学受験の失敗を引きずり、中高一貫校での自分としてはパツパツとしない6年間を過ごした。パツとしていないことが他の人にも伝わったのだろう。中学3年生のある日、授業崩壊していたクラスで「授業を受けたい」と正義感を振りかざしたことを発端として、当時のクラスメイトだった男女複数名からの高校2年生まで続く執拗な嫌がらせに遭った。

授業中の教室を紙飛行機が飛び交い、不味いお菓子をわざと食べては大騒ぎして授業の進行を妨害する生徒が野放しにされている状況に我慢ならなくなり、思わず悔し涙が溢れた。始業式の後の3時間目の大好きな現代文の時間だった。教室を飛び出し、体調が悪いと嘘をついて、人生で初めて保健室でズル休みをした。

4時間目と昼休みを教室の外で過ごし、5時間目に教室に戻ると、「すみません」と小さな文字で黒板に書かれていた。社会の先生がそ

の文字を消してしまいうまで、私はその文字に対して無視を決め込んだ。悪ふざけのように投げかけられた「紙飛行機投げてごめんさい」というクラスメイトの言葉に対しても「謝ってほしいんじゃない」としか言えず、ただ態度を改善してほしいだけだ、という趣旨を伝えることは叶わぬまま、「紙飛行機が当たっただけで泣いた、クラスメイトの謝罪も受け入れない、大袈裟で空気の読めないヤバイ奴」という私の悪評だけが学年中に独り歩きした。

私が嫌がらせに遭ったのは「大人の対応」をしなかったからだ、と当時の担任は言った。確かにその通りだが、あの時の私には授業中に飛んできた紙飛行機に対して怒りの声を上げることが正しくないと疑うに足るだけの人生経験がなかったのだ。結局、私の机を汚いもののように扱うクラスメイトの姿を見て心が折れた。

中学校の卒業式を目前にした3月、私は理不尽に対して白旗を上げてしまった。ポイコットという名の不登校期間はたったの1カ月にも及ばなかったが、断続的な悪口は高校2年生まで続いた。

この経験は私にとってある種の呪いとなった。私の正義は間違っている。私の性格は歪んでいる。私の価値観は間違っている。私の存在価値は不安定である。私は誰にも必要とされない？

最近では解けつつあるこの呪いも、時折顔を覗かせては私の自信と自己肯定感を削っていつてしまうことがある。中高時代の人間関係から解放され、大学に入って新しい世界に足を踏み入れたことによって、私の正義も正しい、私の性格も正しい、私の価値観も正しい、私は誰かの役に立てて、自分には価値があると疑わなくなった。それでも時々、ほんの少しだけ不安になってしまう。

2030年。そんな呪いがあったこともすっかり忘れて、幸せに過ごしていますように。今でも大丈夫な私が、もっと大丈夫になっていきますように。

こころ

冬の前に

金木犀の、小さなオレンジ色の花が咲き始めた頃。

大好きな祖父はこの世を去った。

私は後悔した。何故もつと祖父と話をしなかったのだろう、と。

祖父は交通事故に遭い、身体が不自由になった。

怪我の影響で、少しでも風邪をひくと悪化してしまい、何度も命の危険に晒されてきた。そんなときでも、周りの人の心配をしているような人だった。

私が長期入院をしたときは、車いすに乗って病院まで会いに来てくれた。落ち込んでいる時は、何かを察したように突然電話を掛けてき

た。「元氣か」と電話の向こうから聞こえる声に応じているうちに、不思議と元氣になっていった。

秋のこもれびのような、優しくあたたかい人だった。

私が大学受験をする頃には、祖父はもう老人ホームのベッドの上で寝たきりになっていた。大学進学を報告しに会いに行くと、大きな目を見開いてただ一言「頑張れよ」と私に言った。この一言が、何よりも私の背中を押してくれた。

進学後の私は、初めての一人暮らしや大学での刺激的な毎日をメモに書き留めた。次に祖父に会えた時に、話をして聞かせたかったからだ。文才のあった祖父には到底及ばなかったが、自分なりに話をまとめた。

帰省するとすぐに、祖父に会いに行った。しかし伝えたかった内容は、すぐにどこかへ行ってしまった。日に日に小さくなっていく祖父を前に、うまく向き合うことができなかった。また今回も話せなかったと、メモと後悔ばかりが落ち葉のように積もっていった。

祖父の最期は、家族みんなで看取った。

私は最後の最後まで、何も言葉をかけてあげられなかった。

葬儀の日、金木犀は満開だった。

たくさんの人に見送られながら、祖父は空へと昇って行った。

金木犀の花のかたわらに、真っ白な雪のような蝶が1羽止まっていた。それを見た時、私の積もった思いは、止めどなく溢れていた。祖父のお気に入りだった、庭を見渡せる窓際の席に座って、私はペンを走らせた。

それから私は、日々の出来事や思いを、祖父への手紙としてたたためている。生前よりもずっと素直に、気持ち綴ることができている。手紙は祖父の写真の前に、今でもどんどん積み上げられている。

今年も金木犀の季節がやって来て、満開の花を咲かせ、優しい香りを振りまきながら落ちていった。残された葉っぱが、少し白くなった。

冬は、もうすぐそこまで来ている。

みく

声

あの人が私をどのように呼んでいたのか、もう思い出すことはできないだろう。

私の父は変わった人だった。家にはお金を入れず、子供を連れてゲーム三昧、そんな人だった。父との思い出はほとんどがゲーム関係で、ほぼ毎日ゲームセンターに連れて行ってもらったことやゲームで使うものをよく買ってくれたことしか覚えていない。

学校行事にはとことん興味がなく、運動会ではお弁当だけ食べて家に帰ったと母から聞いたことがある。私にとって「父親」とはそうい

う存在で、「冗談を言い合えるようなそんな関係ではなかった。

中学生の時に離婚して父とはそれっきり連絡を取ったことがない。

一度だけスーパーで遭遇した時があった。

目は合うものの、こちらをジッと見ながら歩いて行ってしまった。フル無視だった。声をかけられると思ったのに。

あれ？ そういえばあの人は私をどんな風に呼んでいたっけ。

怒られた時の声はよく思い出せるのに。褒められた時、自分の名前を呼んでいる時の声が全く思い出せなかった。

辛かった。悲しかった。それでも心が折れなかったのには理由があった。おそらく父は、人の愛し方が分からなかったのだと思う。それ故に自分の好きな物を与え続けて愛してくれていたのではないかと思

う。

父も父なりに私を愛してくれていた。とても不器用で下手っぴな愛し方だったけれど。

もう思い出せない。もう聴けないかもしれない、父の声。それでもいつか聴ける日を願って、父が健康でありますように。

まこと

日曜の夜

「結婚相手の一番の要件は？」「私は優しい人かな」「いや、世の中お金だから稼げる人が一番でしょ」こんな会話が飛び交う。私は迷わず言う。

「ギャンブルしない人かな」

「当たり前だよ。そんなの」

それが当たり前ではないから言っているのだ。と心の中でつぶやきながらも笑ってごまかす。

私の父はギャンブラーだ。ポート以外なら何でもやる。麻雀、競馬、パチンコ……。父の生活サイクルを紹介しよう。日曜から金曜日まではスポーツ新聞の記者として働いている。午後3時に家を出て、みんなが寝静まった2時ごろ帰宅する。そこから朝までひたすらプロ麻雀師、パチンコ師の動画を見てひたすら「勉強」をするのだ。

そして、土日はその「勉強」の成果を発揮するときだ。朝から夜まで文字通り一日中パチンコ屋に行く。そして、そのパチンコ屋で15時からの競馬を見る。その日のパチンコ、競馬の結果で夜ご飯は決まる。父は負けても家族に勝ったと嘘をつくが夜ご飯の結果を教えてくれる。勝ったら高級焼肉弁当、負けたらコンビニ弁当だ。

母と私はそのギャンブル依存症を直そうと日々考えていた。そのためには父が勝ったとき買ってくる焼肉弁当を食べないのが一番なのだ。

はないかと思った。それを母に言うと、

「その儲けたお金も来週にはまたパチンコ玉に代わるだけ。それなら私たちが美味しい思いをした方がいいの。」

それも一理あるなと思ってしまった。しかし、日曜日の夜になると毎週母と父は喧嘩をする。

「これ以上お金を使われたら子どもたちが学校に行けなくなってしまふ。」私たちの老後のことを考えているの？」と言う母に「24で父親になってから自分で稼いだお金を好きに使えたことない。これくらい勝手にさせてくれ。」と言う父。

日曜日の夜はそんな怒号が飛び交うから寝付けなかった。子どもの前でお金の話をしたくないという母のポリシーが逆に日曜の夜に私を暗い思いにさせる。

そんなある日曜、事件が起きた。母が叫ぶように怒っているので寝室の扉をこっそり開けて様子を見てみた。父が母に土下座をしている。どうやら父はギャンブルで家の貯金をすべて使ってしまったらしい。母は泣いて怒鳴っていた。そんなの見たくもないし、ドアを開けてしまったことすら後悔した。また、こっそり扉を閉めて布団を被った。これは夢でありますようにと心の奥から願った。

私も大学生になり、高校までに比べて自由になった。土日は部活やバイトで私は外で過ごすようにする。私が一番つらい思いをしない方法だから。友だちは早く土日になってほしいと言う。日曜の夜は明日から憂鬱だと言う。そう聞きたびに私は思う。温かい家庭なんだな。と。私は逆だ。早く月曜になってほしい。早く月曜の朝になってほしい。

目覚まし時計

玄関から鳴り響く規則的なアラーム音。母の呻き声に続いてピリピリと段ボール箱を開封する音がして、アラームは鳴り止み、すすり泣きの声に代わった。

身体が重く、頭がズキズキする。瞼が腫れあがって目が開けられない。何もする気が起きず、私はただベッドに横たわっていた。

朝6時。父の目覚まし時計に起こされた。

持ち主はいなくなったのに、目覚まし時計は当たり前前に時を知らせる。いつも通り起きて仕事に行くはずだったのに、起こされたのは私と母だった。大好きな父がもういないということが、一気に現実味を

帯びて重くのしかかってきた。人生最悪の目覚めだった。

中学3年生、修学旅行から帰ってきたばかりでまだ楽しい気分が抜けていない9月の昼下がり。一本の電話がかかってきた。悪い知らせの電話はどうして取る前から分かるのだろう。いつもと変わらないはずの呼び出し音が急かすように聞こえて、心がざわついた。

状況もよく飲み込めないまま新幹線に飛び乗った。不安でいっぱいになって堪らず泣き出した私を「絶対大丈夫だから、弱気にならないで！」と母が叱った。

車窓から見える空はどんどん暗くなって、病院についた時には真っ暗になっていた。316号室。忘れたいのに忘れられない。

翌朝病院を出て、タクシーの中から抜けるような青空を見た。空は

一緒に泣いてはくれなかった。

家を出たときは気丈だった母が、隣で泣き崩れていた。

あれから5年。単身赴任先の父を脳出血で亡くしてからあつという間に時が経った。専業主婦だった母は古巣に戻って仕事を始め、中学生だった私は大学生になった。

こんなに時間が流れたのに、私はまだ父がいなくなった事実をきちんと受け止められていない。頭では分かっているけど、赴任先の新湊でまだ働き続けているような気がする。長期休みには帰ってきて、定位置だったテレビの前のソファで寝落ちしている父にまた会える気がしてしまう。

父は凝り性だった。よくおいしいご飯を作ってくれたけれども、鳥の皮を焼いて油をとるところから始めたり、サフランライスを一から作ったり、とにかく時間がかかった。腕によりをかけすぎて、夕飯が出来上がったのが22時半だったこともある。

物に対するこだわりも強かった。絶えず良い物を私に与えようとしてくれていたけれど、いつもちよっぴりずれていた。真っ先に思い出すのは時計の事だ。小学校高学年になった頃、プレゼントに腕時計をねだると、クリスマスの朝、枕元にあったのは懐中時計だった。希望と全く異なる品を見た私はへそを曲げた。こんな感じで父の趣味と私の好みがぶつかったことは山ほどある。

大学生となった今ならば、父が選んでくれた品々は、その良さがよく分かる物ばかりだ。けれども腕時計をねだる小学生に、懐中時計を

渡すセンスはやはりいただけない。その一方で、七五三の時に買って貰った赤い花簪は、当時も今も大のお気に入りだ。納得のいくものを求めて、色々なお店を探し回ってくれたらしい。成人式でも、もちろんつける。

　　パパ、私の振袖姿を見て貰えないのは残念だけれど、あなたの娘はおかげさまで立派に成長しましたよ。

紗々

生きていることへの実感が持てない、なんとなく不安で満ち足りなさを感じている。そんな子どもや若者がいる。いじめ、不登校、自殺などは過去最悪の水準にあるが、そういうしたネガティブな現象は氷山の一角に過ぎなくて、多くの子どもたちがそこに連なる不全感を抱えているように思う。

さまざまな影が重なって子どもたちを覆っているのだから、その一つは家庭内の暴力、特に父親からのものである。児童虐待はずっと増え続けており、20万件を超えるに至った。これも表に出たほんのわずかなものであり、はるかに多くの虐待が子どもたちを傷つけている。

「こもれば文庫」の筆者の多くは世間から見れば恵まれた家庭で育ってきた若者たちである。海外で暮らしていた経験のある学生もいる。彼らが受けた虐待や目撃した暴力は、児童相談所が対応した虐待相談、警察が受理したDV相談の統計の中には入っていない。

児童虐待やDVは毎年ずっと過去最悪を更新しているが、その背後には統計に表れないおびただしい被害が広がっているのは間違いない。これまでは虐待などには縁のないと思われていた平穏で豊かな層の家庭にも暴力が広がっている。

ストレスにまみれて大人は生きている。広がるばかりの社会の格差から落ちないように、神経を削り取られるようにしながら自分を追い込んでいく。

自己責任を過度に求められるストレスに耐えきれず、身

近な弱者への暴力という形でネガティブな感情がぶつけられるのだろうか。

女性の社会参加が進み、もっと社会的影響力のある立場の女性を増やそうという流れは強まっている。無意識のうちにはフラストレーションを感じている男性は意外に多いのかもしれない。ふとしたとき、男性優位の古い価値観が自分も気づかないところでひっそり息をしていることはないだろうか。

虐待にまでは至らなくても、家庭内の小さな諍いが子どもものところに暗い影を落とす。

大人が気づかないことでも、子どもの繊細な心は傷つくことがある。

その傷口は癒されることのないまま長く残る。誰かに相談できることもなく、相談していいのかわかってもわからない。

い。受験を最優先した学校生活の中で、自分を苦しめている傷に向き合う機会を奪われた子どもたちなのである。

いじめ、リストカット、ひきこもり、自殺、障害のある人やLGBTなど少数者への偏見や差別。正直で繊細な人を傷つけるものはゆがんだ社会のプレートの上で起きている。

どこかで子どもの声が聞こえたら、自分も息が苦しくなったなら、「こもれば文庫」をひらいてほしい。

風にゆれる木々の葉からこぼれる淡い光を浴びよう。宇宙の無限のいのちの連なりの中で自分が生きていることを感じられるかもしれない。

正誤表

本書裏表紙にて下記の通り誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

(誤) 令和5年度社会福祉振興助成事業

(正) 令和4年度社会福祉振興助成事業

父よ こもればび文庫第2集

2023年3月31日 初版第1刷発行

編著者 こもリズム研究会
ブックデザイン 細山田デザイン事務所
発行者 こもリズム研究会
発行所 社会福祉法人 千葉
〒279-0042
千葉県浦安市東野1丁目7-5

印刷 レタープレスレーターズ
製本 和光堂株式会社

©comolism 2022 Printed in Japan

乱丁・落丁の本がございましたら、当研究会までお送りください。本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。

本書は、独立行政法人福祉医療機構の令和4年度社会福祉振興助成事業で作成されました。

こもリズム研究会

いじめ・虐待・ひきこもりを考えるソーシャルワーカー&当事者・学生の集まり。2021年6月開設。生きにくさを抱える若い世代による「こもればび文庫」、福祉職やジャーナリストによる「こもジャーナル」を発信している。

メール
comolism@gmail.com

ウェブサイト
<https://comolism.com/como-library/>
<https://note.com/comolism/>